

親鸞と本覚思想

2013年3月29-30日 龍谷大学 嵩 満也

1. 鎌倉新仏教と本覚思想をめぐる3つの学問領域での議論

1) 仏教思想史学における「本覚思想」をめぐる議論

① 島地大等 (1926) 「日本天台研究の必要を論ず」(『思想』60号) 【資料1】

→ 中古天台の本覚思想を中古天台教学だけでなく、平安期から鎌倉期の仏教思想、さらには道德思想、神道思想、芸術に大きな影響を与えた思想として位置づけ、その研究の必要性を提唱した。

→ 個別宗派的な日本仏教思想の理解を、本覚思想という基調的な思想との関係において全体的に捉えるという問題意識。

→ 本覚思想そのものの理解は、非常に幅広い曖昧なものに留まる。

→ 親鸞の「教行証」という用語、「信心正因」の思想と中古天台口伝法門との類似を指摘。【資料2】また、「一念業成」「久遠実成の阿弥陀仏」「自然法爾」などの「無作の救済」は「本覚門の信仰」をよくあらわしているとする。

② 裕慈弘 (1948) 「鎌倉新仏教の四大基調とその伝統」『日本仏教の展開とその基調』

(上) 【資料3】

→ 鎌倉新仏教を天台本覚法門に見られる「一乗思想」「絶待三学」「真俗一貫」「信仰主義」という4つの性格を基調にするものとして捉える。

→ 天台本覚思想とのかかわりから鎌倉新仏教について研究する必要性について指摘したが、戦後の中世日本仏教史学会では60年代半ばに至るまで殆ど注目されなかった。

→ 「本願一仏乗」、「無戒」(絶待戒)、「非僧非俗」(?), 「信心正因」という親鸞の思想も天台本覚法門の上に成り立つと指摘。

③ 田村芳朗 (1965) 『鎌倉新仏教思想の研究』【資料4】

→ 天台本覚思想の思想基盤を明らかにするとともに、鎌倉新仏教の祖師の教えを、天台本覚思想と比較することで、それぞれの祖師たちの新仏教としての特色を明らかにしようと試みた。

→ 天台本覚思想の起源と進展について

「空的相即論」→「内在的相即論」→「顕現的相即論」→「顕在的相即論」

→ 日本の天台本覚思想の淵源は、不二を基本とする「空的相即論」にあるとした上で、その後『涅槃経』などにみられる仏性、如来蔵思想の影響を受け、永遠の真理や仏が可能性として現実や衆生の中にひそむという「内在的相即論」を

経て、現実や衆生は永遠の真理や仏が顕現したものであるという「顕現的相即論」としたところに日本の天台本覚思想が成り立ったとする。そして、この「顕現的相即論」（理顕本）をさらに一步進めて現実の事象こそ永遠の真理のすがたであるという「顕在的相即論」（事常住、絶対的一元論）において最高潮に達するとした。

→「（親鸞は）他力を徹底させたと言うよりは、逆に法然によってとりだされた浄土教の相対性を不二絶対本覚思想でもって補整した」（田村 1965、534）と指摘するように、親鸞思想は本覚思想を基調とする思想であると理解。

2) 中世歴史学における「本覚思想」をめぐる議論

① 黒田俊雄（1975）『日本中世の国家と宗教』

—（1977）「顕密体制論の立場—中世思想史研究の一視点」

—（1990）『日本中世の社会と宗教』

→戦後の日本中世宗教史のパラダイムシフトとしての「顕密体制論」【資料5】

→「顕密体制論」（“顕密主義”と“顕密体制”）の枠組み

→顕密主義：「仏教ひいては全宗教を顕教と密教の両面から捉え、その一定の関係として理解する論理（中略）。歴史的には密教の絶対優位を承認するなかで展開したもので、本質的には、日本で独特な姿に形成されたところの密教の一形態」（『黒田俊雄著作集』第2巻「顕密体制論の立場—中世思想史研究の一視点」、291頁）

→顕密体制：「顕密主義を基調とする諸宗が国家権力と癒着したかたちで宗教のあり方を固めたその体制」（同上、292頁）

→顕密主義は9世紀を通じて発展・成熟し、10世紀には教学的にも、教团的にも支配的な思想となった。顕密体制は、10世紀末から特徴を見せ始め、11世紀末には確固たる体制となった。12世紀末に始まる仏教改革運動は、顕密諸宗に対する改革運動であったが体制を揺るがすにいたらず、顕密体制は14世紀末の戦国争乱の中で荘園制が解体されて崩壊。

→「旧仏教」と「新仏教」という枠組みから「旧仏教」の主流派を「正統派」、「旧仏教」の改革運動を「改革派」、「新仏教」を「異端派」と呼び、「改革派」「異端派」を「異端＝改革運動」と位置づけた。

→新仏教中心史観への批判。既に島地などに暗示されていた中世を包括的に理解する枠組みとして、本覚思想を内包する顕密体制論を提示。

→「旧仏教」「新仏教」という枠組みとその特色（易行性、民衆化、専修性など）の上に構築された戦前・戦後の真宗学への問題提起であるが、真宗学ではこのような新たな視座を踏まえた研究はほとんど見られない。

②平雅行（1992）『日本中世の社会と仏教』

—（2011）『歴史のなかに見る親鸞』

→黒田の顕密体制論を継承しつつ、顕密仏教—改革派—異端派という視点から中世仏教思想の特質について研究。

→「鎌倉新仏教」の「異端派」としての思想的意義と独自性について検討。

→たとえば、思想的意義として次の3点を指摘している。

i) 仏法の一元化

「専修念仏とは、念仏の専修ではなく諸行往生の否定。念仏信仰は愚かな大衆のために簡便化された方便であるという性格を払拭し、今や末代に生きるすべての衆生が信仰すべき唯一の心の仏法となった。このことからすれば専修念仏は、平安浄土教（諸行往生）や悪人正機説の否定・克服と捉えなければならない。」（483頁）

ii) 此岸の宗教的平等

「法然は諸行往生を否定し、親鸞は聖道得悟を否定したが、このことは他力信仰以外の一切の人間活動から宗教的価値を剥奪したことを意味する。つまり持戒であれ破戒であれ、造塔起塔であれ殺生であれ、こうした身体的・可視的行為になんの宗教的な価値はないのである。」（485）

iii) 権力からの内面的自立に立った王法観

「王法による仏法擁護の状態を理想とし、それに反する王法の弾圧や謗法帰依を非難しながらも、仏法の流布を王権に依存しようとはしていないし、国王の仏法流布権を容認していない。」（487）

→歴史の脈絡のなかでの正統と異端の関係を重層的に捉えつつ、異端の独自性の意味を考察

→近代的概念の枠組みから鎌倉仏教を理解することへの批判

「中世宗教の内在性の中から分析概念を抽出する姿勢だけは手放してはならない。」（平雅行（1992）『日本中世の社会と仏教』、20頁）

→平が指摘する分析概念：「平等的悪人観」「民衆の内面的権威性の回復」

【資料6】

→真宗学に対する、歴史のなかの親鸞思想の本質的意義についてのさまざまな問題提起。

3)近代仏教学における本覚思想批判

①袴谷憲昭（1985）「差別事象を生み出した思想的背景に関する私見」

—（1989）『本覚思想批判』

松本史朗（1989）『縁起と空—如来蔵思想批判』

—（2001）『法然親鸞思想論』

- 「本覚思想は仏教ではない」(袴谷)【資料7】
- 本覚思想を非仏教の説である「基体説」に基づくという理解。また、仏性・如来蔵思想も「基体説」とする。
- 「仏教とは何か」という根本的問いからの問題提起。
- 曹洞宗における差別問題という現実的課題への回答。【資料8】
- 差別の根源を本覚思想に見られる本源を平等一如と見ることにより、現実の差別を肯定する構造に見る。
- 日本仏教における観念論・抽象論への批判
- 真宗学にとっては、「仏教とは何か」という根本的問題についての問題提起であると同時に、教学が観念論・抽象論となることによる思考停止(批判の欠落)、現状肯定(追従)へと陥る危険性についての問題提起という面も持つ。

2. 本覚思想をどのように評価するか

1)本覚思想をめぐる3つの議論を踏まえて見えてくるもの

①島地以来の仏教思想史学における本覚思想に対する評価

- 肯定的評価(大乘仏教の空思想の展開)
- 否定的評価(修行不要論等を肯定する逸脱した仏教)
 - ・親鸞思想は本覚思想を受容した思想であるとする理解
 - 島地大等、望月信亨、田村芳朗
 - ・親鸞思想は本覚思想に批判的な立場をとる思想であるとする理解
 - 重松明久、大野達之助、末木文美士、黒田俊雄、平雅行
- 結果として、重層的な本覚思想に対する評価がなされてきた。【資料9】
- つまり、理論としては否定できないが、実際としては問題を含むという評価(→本願寺派の教学でも同じで、その矛盾を解消する上で「法徳」と「機相」という論理が用いられた。)

②本覚思想の概念的な曖昧さ

- 袴谷、松本による本覚思想(如来蔵思想)批判により、根底からその評価が問われることになった。
- 思想的には松本の問題定義が根源的なものであるが、一般的には袴谷による批判の影響が大きかった。
- 花野充道(日蓮思想研究者)の袴谷批判。【資料10】
 - 独善的な本覚思想理解
- 末木文美士の松本批判。【資料11】
 - 原典本質主義的な理解
- 少なくとも言えることは、本覚思想のみが問題ではなく、たとえば末木が指摘

するように「仏教の無我や空は必然的に極めて不安定な構造」を持ち「この不安定性こそ仏教が提示する人間存在のあり方」であるとすれば、本覚思想がそのような「不安定性」が解釈される文脈においてどのように解釈されたのか、そしてされるのかという問題が重要であるということ。

③親鸞研究の今後の課題

- 親鸞研究においてそのことを考える上で、「中世宗教の内在性の中から分析概念を抽出する姿勢」を持って問題提起を行っている平雅行の研究は大いに注目される。
- 親鸞研究においては、末木の言う「不安定性」が、平の言う「平等的悪人観」「民衆の内面的権威性の回復」といった概念にあたるのか、またそのことがそもそも親鸞思想の上で語りうるかどうかを含め、そのような問題提起に真正面から取り組むことが求められる。

2)本覚思想をめぐる議論に対する親鸞研究（真宗学）からの応答

①普賢大円（1959）「真宗教学と本覚思想—特に仏性論を中心として—」

- 「真宗の如来観に本門本覚の思想が流入していることは、疑うことは出来ない」
- ただ親鸞は本覚思想を「決して聖道教諸説のそのままでなく、十分に浄土教的に咀嚼されたものである」（普賢大円（1959）「真宗教学と本覚思想—特に仏性論を中心として—」『龍谷大学論集』第361号、1頁）とする。また、「如来の立場」でのみ受容したとする。

②中西智海（1967）「親鸞聖人における本覚と実存の問題」『真宗学』35・36号

- 親鸞が浄土教の相対性を捨て自他一如・絶対不二の「本覚思想」に立ち返ったとする田村氏の先の解釈に対し、「このような田村博士の親鸞解釈の限界に焦点をあててみると、親鸞の宗教的実存の立場、「信」に対する深い洞察に至りえなかったという点が根本的に指摘されねばならない」とそれを批判的に捉えている。しかしその一方で、そのことは「親鸞の真宗の背景に本覚思想のあることを否定しているのではなく、あくまで親鸞の信仰的実存の立場でそれを消化している」ことを意味する。
- いずれにしても、親鸞の思想を本覚思想との対立・克服としては理解していない。
- 興味深いのは、普賢が江戸時代の宗学に「本覚法門立て」と「始学法門立て」の二つがあり、それは親鸞の教義に源泉があり、その背景に本覚思想があるとしている点である。【資料12】
- 親鸞の思想は本覚思想を基調として理解できるかの、逆に対決・克服という関係において位置づけるかは、親鸞の思想の上において明らかにされなければな

らないが、宗学的な親鸞研究においては、本覚的理論を用いた親鸞解釈が長い間行われてきた。早い段階では、存覚は『六要鈔』『顕名鈔』で「本覚」という言葉を用い、本覚とは久遠実成の阿弥陀仏であり、「始覚」とは十劫成仏の阿弥陀仏のこととして、理智不二、始本不二として捉えている。【資料 13】

また、蓮如の『御文章（御文）』に見られる「仏凡一体」「機法一体」という用語は、西山浄土宗系の著作とされる『安心決定鈔』に見られるものである。同鈔は、『蓮如上人御一代聞書』に「安心決定鈔のこと、四十余年が間御覧候へども、御覧じあかぬと仰せられ候。また金を掘り出す様なる聖教なりと仰せられ候」（真聖全 3、599 頁）とあるように、蓮如の思想に大きな影響を与えたと考えられるが、内容的に本覚思想の影響が強く見られるものであることも注意される。【資料 15】

→ 覚如、存覚、蓮如の思想の当否ではなく、親鸞以降の親鸞理解を通して親鸞思想が語られるところに、従来親鸞思想と本覚思想との関係を考える場合の躓きの石となっている。それらを親鸞の原意にもう一度返していくことが、このような本覚思想をめぐる議論を通して現在の親鸞研究（真宗学）に求められているもう一つの課題であると言える。

3. 親鸞と本覚思想

① 嵩満也（2000）「親鸞と本覚思想」（配布論文）

1. 中世思想史学からの問題提起について

2. 中世日本の本覚思想

3. 親鸞思想と本覚思想の関係についての諸説

4. 中世における本覚思想批判

i. 宝池房証真の批判【資料 16】

→ 非因非果の外道

ii. 法然の批判【資料 17】

→ 『真如観』：「これは恵心のと申て候へども、わろき物にて候也」

iii. 道元の批判【資料 18】

→ 「本来本法性、天然自性身」への疑問と「修証一等」

iv. 親鸞の批判【資料 19】

5. 親鸞の思想構造と本覚思想

→ 『三十四箇事書』（院政期成立、伝源信作）の思想構造との比較

6. 今後の課題

② 「親鸞思想の思想構造と本覚思想」

【配布論文 10 頁～参照】

- 『三十四箇事書』における煩悩即菩提、「生死即涅槃」の理解
- 「正信念仏偈」、『尊号真像銘文』の文における親鸞の「煩悩即菩提」、「生即涅槃」についての理解。
- 現実の単純肯定を意味しない親鸞思想と『三十四箇事書』に見られる本覚思想とは、その思想構造において異なる。
- 真実についての「二種法身」的（「異而不可分、一而不可同」）理解
- 否定的契機を含んだ一元論（脱二元論）の立場
- 「罪をけしうしなわずして善となす」
- 「転成の論理」と呼ぶことのできるこの論理は、対立する二つの価値の緊張関係を保ちつつ同時に成り立たせる論理（即非の論理）であると同時に、時間的な差を含むプロセスの論理であるという点で、本覚思想とは異なる論理構造を持つと言える。